

青いボタン

小川未明

青空文庫

しょうがつこうじぶん はなし
 小学校時分の話であります。

まさお くみ
 正雄の組へ、ある日のこと知らない女の子がはいってきました。
 「みなさん、今日から、この方がお仲間になられましたから、仲
 よくしてあげてください。」と、先生はいわれました。

知らない人がはいってくることは、みんなにも珍しさを感 かん
 じ ひと ひと
 せました。正雄ばかりではありません。他国からきた人に対して
 は、なんとなくすこしの間は あいだ はばかるような、それでいて早く親
 しくなつて、話 はな してみたいような気持ち きもち がしたのであります。

それほど、他国 たこく の人の ひと だれか、知らない遠い国 とおいくに からきた人 ひと だとい
 う、一種 しゆ の憧れ心 あこがれこころ をそそつたのでした。はじめの二、三日 にち は、

その女おんなの子こに對たいして、べつに親したしくしたものもなかつたが、また、悪わる口くちをいうようなものもありませんでした。

だんだん日ひがたつと、こんどは反はん對たいに、独ひとりぼっちおんなの女この子こを、みんなして、悪わる口くちをいったり、わざと仲なか間まはずれにしたりして、おもしろがったのでした。その女おんなの子この姓せいは、水野みずのといいましたが、顔かおつきが、どこかきつねに似にていましたところから、だれいうとなく「きつね」というあだ名なにしてしまいました。

休やすみの遊あそぶ時じ間かんになると、みんなは、女おんなの子こを取とり巻まいて、「きつね、きつね。」といつて、はやしたてました。

その女おんなの子こは、負まけぎらいな、しつかりした子こでしたけれど、相手あいてが多た数すうなので、どうすることもできませんでした。それに、

知らない土地とちの学校がっこうにはいったことですから、小さちいくなって、
 ごこんで黙だまっていましたでしたが、ついにはたまたまなくなつて、泣なき出だし
 てしまいました。しかし、時間じかんになつて、教きょう室しつへはいる時じぶん分
 には、いつものごとく泣なきやんでいましたために、先せん生せいは、ち
 つともそのことを知しりませんでした。

ある日ひのこと、正雄まさおの家うちへ、知しらないおばさんがはいつてきま
 した。

「私わたしの家うちの娘むすめとお坊ぼつちゃんとは、学が校っこうで同おなじ組くみだそうでごごい
 ます。それで、今日きょうは、おねがいがあつて上あがりました。娘むすめが、
 毎まい日にち、学が校っこうで、きつね、きつねといわれますので、学が校っこう
 へゆくのをいやがつて困こまりますが、どうかお坊ぼつちゃんにねがい願がいし

て、みんながそんなことをいわないようにしていただきたいもの
です……。」と、頼みました。

正雄の家と水野の家とは、あまりそう遠くなかったので、それ
で、彼女の母親がきたものと思われま

す。学校では、正雄も、いつしよになつて悪口をいつた一人な

のでした。なかには、まったくそんな悪口などをいわずに、黙
つていた生徒もありました。いま、正雄は、自分の行為に対して、
気恥ずかしさを感じずにはいられなかつたのです。

「それは、お気の毒のことです。うちの正雄に、あとか
らよくいきかせますから……。」と正雄のお母さんは、水野の
おばさんに答えられました。

おんなこ
女の子の母親が帰った後で、正雄は、お母さんから、弱いものをみんなしていじめることは卑怯なことだといわれて、正雄は、真に悪かったと感じました。

あくる日から、正雄は学校へ行って、みんなが、「きつね、きつね。」といって、からかった時分に、自分はいわなかったばかりでなく、みんなに、

「弱い女の子をいじめるのは、卑怯だから、よそう。」といいました。

正雄のいったことを、ほんとうだと思って悪口をいうのをよしたものも多数ありましたが、なかには、「君は、きつねの味方になったのかい。」といって、あざ笑ったものもあります。

しかし、いままでのように、水野みずのに対して、「きつね。」とい
つて、からかうものがなくなりました。ただ、ときどき忘れてい
たのを思い出したように、彼女かのじよがおとなしく遊あそんでいるところ
へいって、「きつね。」といいますと、彼女かのじよは、もう負まけてい
ずに、反はん抗こうしました。そして、男の子おとこのほうが、しまいには逃に
げ出だしてしまつたのです。

正雄まさおと彼女かのじよとは、だんだん仲なかよしになつてまいりました。正
雄まさおのおかげで、このごろは学が校こうへいっても、みんなからいじめ
られないのを喜よろこんでいました。そして、どうか自分じぶんの家うちへ遊あそびに
きてくれるようにといいました。

ある日ひのこと、正雄まさおは、彼女かのじよの家うちへ遊あそびにゆきますと、女おんなの

ここの母親はたいそうお礼をいわれました。そして、正雄がよく自分の子供をいたわってくれたといつて、お菓子などをくださいました。

女の子のお父さんは、すでに死んでなかったのです。その家は、

彼女とお母さんの、さびしい二人ぎりの生活でありました。

女の子は、絵本を出したり、お人形を出して見せたりしまし

た。二人は、いつしよに、その絵本をひろげてながめていました

が、その遊びにも飽きた時分でした。

「ああ、私この箱の中に、大事にして持っている、青い石のボタ

ンがあつてよ。亡くなられたお父さんからいただいたの。これを、

あなたにあげますわ。」といつて、彼女は、小さな蒔絵のして

ある香箱こうばこのふたを開あけて、中なかから、三個このボタンを出だして、正雄まさおの手に渡わたしました。

正雄まさおは、それをしじみと見みながら、きれいなボタンだと思おもいました。青い色あおいろが、いかにも美うつくしかったです。

「お母かあさんに聞きかなくて、しかられはしない？」と、正雄まさおはいいますと、

「私わたしのですから、あげてもいいの。」と、彼女かのじよは笑わらいながら答こたえしました。

正雄まさおは、それをもらつて、家うちに帰かえつたのでありました。

学校がっこうへゆくと、二人ふたりは、家うちで遊あそんだようには親したしく、みんながなにかいうかと思おもつて、できませんでした。

それは、正月しょうがつのことでありました。学校がっこうが十日とおかあまり休やすみがあった、その後のことあとです。学校がっこうへゆくと、水野みずのの姿すがたが見えませんでした。どうしたのだらう？ かぜでもひいて休やすんでいたのでななかろうかと正雄まさおは、思おもっていました。

ある日ひのこと、先生せんせいは、みんなに向むかって、

「水野みずのさんは、遠とほい国くにへ引ひつ越こしなすつて、学校がっこうを退ひきましたから、空あいている席せきを順じゆんにつめてください。」といいわれました。

正雄まさおは、はじめはじめてそれと知しってびっくりしてしましまったのです。

「どこへ越こしていつてしましまつたらう。」と、正雄まさおは、彼女かのじよを思おもい出だしてささびしい気きがしたのでありあります。

正雄まさおは、彼女かのじよからもらつた、三こ個このボタとンを取とり出だしてなが

めていました。はじめは、それほどとも思わなかったのが、だれでも、このボタンを見た人は、「まあ、きれいなボタンだこと。」
と、ほめぬものはなかったのです。

そのうちに、春となりました。空の色は美しく、小鳥は鳴いて、いろいろな花が咲きました。正雄はこうした景色を見るにつけて
彼女のことを思い出しました。

ちょうど彼女が、学校へ上がったときには、唇をはらして、髪をみような形に結っていたので、どこか、その顔つきがきつねに似ていると思つたのが、後には、そうでなかったこと。そして、その目の色のうるんで、やさしみのあつたのが、ちょうど、この春の空を見ると感じるのと似たものがあつたような気がして、

まさお
正雄は、空想くうそうにふけりながら、うつとりとしたのであります。

「なんで、黙だまっていったんだろうか？　そして、手紙てがみもくれないのだろうか。遠とおい国くにってどちらの方ほうなんだろう……。」「と、正雄まさおは思おもいました。

三個このボタンだけは、まだ、彼かれの手てに残のこっていました。正雄まさおは、それを糸いとにつないで、持もって遊あそんでいました。その青あおい色いろは、水みずの色いろのようにも、また空そらの色いろのようにも、ときには、海うみの色いろのようにも、光線こうせんの具合ぐあいで、それは、美うつくしく見みえたのであります。このボタンを見みた人ひとは、だれでもちよつと立たち止どまっています。じつと目めをその上うえに落おとささないものはありませんでした。知しらない人ひとは、黙だまって見返みかえってゆきました。知しった人ひとは、「まあ、美うつく

いボタンだこと、ちよつと見せてください。」といつて、掌の上てのひらうえに載せてながめたのであります。

しかし、だれも、この青いボタンが、石で造られたものか、貝かいで造られたものか、判断はんだんに苦しんだのであります。

「この青いボタンを、一つくださいな。」と、正雄まさおは、たくさんの人ひとからいわれました。けれど、このボタンをなくしてしまふことは、彼女かのじよに対する思い出おもからも、遠く離れてしまふことだと考かんがえて、彼はかれ、だれにもやらなかつたのであります。

「このボタンを僕ぼくにくれた、女の子おんなこの居所いどころがわかつて、そして聞きいてみなければあげられない。その女の子おんなこはお父さんとうからもらつて、大事だいじにしていたのを僕ぼくにくれたのだから……。」と答こたえま

した。

みんなは、「もう、いままで、なんの便りもないのだから、その女の子の居所のわかりっこはない。」といいました。

しかし、正雄は、青々と晴れた大空を見渡して、「この、空の下のどこかに、きつと女の子は、お母さんと住んでいるのだらう……。」こう考えると、いい知れぬ悲しさと、なつかしさとが、感じられたのであります。

ある日のことでした。近所に住む、脊の高い、顔の黒い男が、「坊ちゃん、私に、どうかこのボタンを一つください。私は、これを時計のかぎにぶらさげておきます。私は、汽車に乗って、方々を歩くのが勤務ですから、どこかで、そのお嬢さんが私の乗

つている汽車きしゃにはいつておいでになり、私の胸むねにぶらさがつてい
 る、この青いボタンあおを見て、どうして私が手てに入いれたかとおたず
 ねにらんものでもありません。私の乗のつている汽車きしゃは、幾百マ
 イルも先さきまでゆき、その間あいだに、数かずえきれないほどの停てい車しゃ場ばを通つ
 過うかするのですから……。」といいました。

正雄まさおは、この若い汽車乗のりのいうことを聞きくと、なるほど、そ
 うしたことがあるかもしれないと思おもいました。それで、女おんなの子この
 居いどころ所ところがわかつたら、すぐすくに知しらせてくれるようにという約やく束そく
 で、この男おとこに青いボタンあおを一つ分わけてやりました。またある日ひの
 ことでありました。正雄まさおは、家うちの前まえで遊あそんでいますと、金魚きんぎよ売う
 りが通とおりました。金魚きんぎよ売うりは、みんなを見みると、金魚きんぎよのはい

つているおけを地に下ろしました。みんなは、そのまわりに集まつて、金魚をのぞいて見たのです。尾の長いや、円いのや、また黒と金色のまだらなどの金魚が泳いでいました。

そのとき、金魚売りは、正雄の持つていた青いボタンを見て、目をまるくしながら、

「坊ちゃん、いい金魚をあげますから、そのボタンを一つくださいらないか？」と、頼みました。

正雄は、金魚売りのおじさんに、青いボタンの由来を話したのです。すると、金魚売りは、

「坊ちゃん、私は、こうして、諸国を流浪します。それは、どんな村でも、また小さな町でも、春から夏にかけて、歩いてまわ

ります。この青いボタンを私のかぶっている笠のひもに結びつけておいたら、いつか、そのお嬢さんが、金魚を買おうとなさる時分に見つけて、どこから、この青いボタンを手に入れたかとお聞きなさらぬものでもありません……。」といいました。

正雄は考えましたが、なるほど、この金魚売りのいうことは、ありそうなことでした。そこで、青いボタンを一つ分けてやりました。金魚売りは金魚を、正雄がいらぬといつたのに、三びきくれました。

正雄の持っていた、青いボタンは、残り一つになりました。彼はこの一つのボタンだけは、けつしていつまでも放すまいと思いましたが。いつになったら、停車場で、また、汽車の中で、あの

男は、彼女に出あうでしようか。そして、またあの金魚売り
は、いつになつたら、彼女の住んでいる町へ着くでしようか。
三びきの金魚は、まだ達者で水盤の中に泳いでいます。
正雄は、青いボタンの一つをまくらもとに置いて寝たある晩に、
赤い家のたくさん建っている港の景色を夢に見たのでありました。

——一九二四・一〇作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「赤い鳥」

1925（大正14）年1月

※表題は底本では、「青《あお》いボタン」となっています。

※初出時の表題は「青い釦」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青いボタン

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>